

落をもたらしした。貧困化した遊牧民は冬營地に定着し、集落をつくりはじめた。集落は、キーマークにおける国家機構の形成、家父長的封建諸關係の形成、社会内部および隣接諸地域との交易の発達に伴って、都市となった。中世諸都市は、軍事行政の中心となったばかりでなく、交易・手工業・農耕の中心となった。以上のことから、キーマークは、九世紀末——一世紀初に原始的初期封建国家組織を具有していたと推定することができる。

一世紀以降、キーマークは急速に衰退していくが、その外部的要因は、一連の民族移動に求められる。その第一波は、クーン族の西進である。中国北方にいたと思われるクーン(Chin)族は、遼帝国の圧迫のもとに西方に移動したが、キーマークの領域の北部で、(キーマークに服属していた)カーイー(Ch)族に襲撃され、さらに西進して、同じくキーマークの構成要素の中にはいっていったシャル族(キプチャク)を駆逐した。そのため今度はシャル(Shar)族が西方へ移動し、シルダリア下流域とカスピ海北岸からオグーズを追い払い、オグーズは南ロシアと黒海北岸のステップに逃走した。このような混乱の中でカーイーとキプチャクが抬頭し、キーマークは、その内部的矛盾の激化ともあいまって衰微し、キプチャクに従属するところとなつていったのである。

以上が本書の概要である。本書は、著者自身も述べているように、その主眼はあくまでもイスラム文献の史料批判と分析におかれており、キーマーク研究の第一歩となることを目的としている。その観点から見れば、本書は、今後の研究者に多大の寄与をなすと思われる。

(B) Ye. Kunekov: Gosudarstvo Kimakov IX-XI vv. po Arabskim Istochnikam, Alma-Ata, 1972.)

E・アシュトル著

中世後期オリエントにおける

貴金属と国際收支

加藤 博

近年の西欧学界におけるイスラム社会経済史研究の進歩はめざましい。この進歩にとりわけ貢献した研究者として、パリ高等研究実習学院を舞台に活躍するクロード・リカーエンとエリヤフ・アシュトルの二人を挙げるのに異を唱えるイスラム社会経済史家はいないであろう。そして、この二人は互いに協力し合い、補足し合いながら研究活動を行っているようにみえる。その際、ここ数十年間におけるカーエンの関心が制度史研究にあるのに対し、ここで紹介するアシュトルのそ

れは貨幣・物価問題に関する数量経済史的研究にあると言える。彼の多くの物価統計に関する雑誌論文は、大著『中世オリント物価賃銀史』(*Histoire des Prix et des Salaires dans l'Orient Medieval*, S.E.V.P.E.N., 1969)に集大成された。そこには、イスラム教の発生からオスマン・トルコの征服に至る中世イスラム社会での貨幣・物価に関する統計数字が、現在手にしうる限りのアラブ語資料その他から収集され、整理されている。そして、そこにみられる顕著な現象として、一時的な危機の時代を除いて、貨幣交換比率と穀物価格の長期的安定があったことが強調されている。

さて、その二年後に出版された標題の本書は、前著での課題をさらに発展させようとするものである。すなわち、本書の主題は貨幣制度の存立条件であるイスラム社会の貴金属事情と、中世後期の地中海国際貿易におけるイスラム社会の国際收支の実態である。今まで、イスラム社会における高度な貨幣経済の存在、ならびに中継貿易で占めたイスラム社会の重要な役割は注目され続けてきた。しかし、その研究は、一部の例外を除いて、実証的な数量的裏付けのない図式的なものにとどまることが多かった。本書は、規模は小さいが、この課題に数量的裏付けを与えることによって、従来の定説を修正しようとする労作であり、これまでの著者の研究成果を待って初めて可能となった業績である。

以下、叙述に従ってその要旨を紹介し、続いてコメントを述べてみたい。

二

「序文」。本書の課題と文献紹介が述べられる。マムルーク朝時代にあらわれた貴金属の不足現象は、大量の金の流通に基づいて発展したイスラム経済の崩壊の兆候である、と一般に考えられている。それでは、貴金属の減少はどのような原因によって引き起こされたのであろうか。この間に答えるために、著者は以下の三項目を本書の課題として挙げる。(一)イタリヤ人とポルトガル人がそれぞれ北アフリカと西アフリカへ進出したことによって、西スーダン金がヨーロッパ地域へ流出したことは、イスラム地域での貴金属事情に致命的打撃を与えたのか。(二)イスラム社会の国際收支は赤字であったのだからか。(三)イスラム地域における貴金属の減少の原因が国際收支の赤字にあったのではないとすれば、その原因はどこに求められるであろうか。これらの課題を解明するために、著者が依拠するのは、ヴェニスを中心としたイタリヤ語資料とアラブ語資料である。

第一章「金の供給」。中世イスラム社会はさまざまな出所から金を獲得していた。著者は、アラブ征服後の貴金属の放財、ファラオの墓の金採掘、ヌビア峡谷の金鉱山、隣接地域の君

主からの貢物などを順次検討し、中世後期においてこれら金供給源がすべて枯渇していたことを示す。そのため、当時のイスラム社会の金供給は、前代にもまして西スーダンの金に依存していた。そして著者は、この西スーダンの金は北アフリカルートでよりも、むしろ内陸ルートを通じて直接ナイル峡谷に運ばれたことを指摘する。彼によれば、当時西スーダン地域とエジプトの活発な交流は、商業関係のみならず文化面にも及んでいた。従って、十三世紀以降北アフリカに進出したヨーロッパ商人が西スーダンの金の一部をヨーロッパ地域に輸出したとしても、いまだエジプトには大量の西スーダン金が流入していた。イスラム社会の金供給により大きな打撃を与えたのは、十五世紀後半におけるポルトガル人のギニア海岸への進出と、そこでの西スーダン金の獲得であった。

第二章「銀の供給」。銀のイスラム地域への流入もまた、オスマン・トルコの征服まで跡絶えることなく続いた。たしかに、十一・二世紀と十五世紀初頭に激しい銀不足現象がイスラム地域を襲ったことは事実である。しかし、それも一時的な現象にすぎなかった。イスラム地域は常に、ヨーロッパ地域と中央アジアの二方向から銀の供給を受けた。こうして、十字軍がヨーロッパ銀をイスラム地域に持ち込んだこと、またモンゴル人のオリエント進出に伴って中央アジアの銀がこの地方に流入したことによって、十一・二世紀に生じた一時

的銀不足は解消したし、同様に、十五世紀初頭に生じた銀不足現象も、商取引によってヴェニス銀貨がイスラム地域に流入したことで、チムールがオリエントに侵入した際、銀をこの地域に持ち込んだことによって、まもなく収まった。もっとも、十五世紀初頭の銀不足現象以降、イスラム社会の銀減少が顕著になっていったことは疑いない。しかし、この時代においても、イスラム地域に銀不足現象が起こると同時に、金銀比価の格差を利用してヨーロッパ地域から銀がイスラム地域に流入し、その結果マムルーク政府は、オスマン・トルコの征服まで相当量の銀貨を発行することができたのであった。

第三章「銅の供給」。イスラム社会の貴金屬不足を示す真の兆候は、銅貨の市場での氾濫である。銅の供給はほとんどヨーロッパ地域からの輸入に依存した。十三世紀以降の銅貨の氾濫は、マムルーク政府の貨幣政策の転換の結果であるが、イスラム地域への銅の流入を促した原因は、銅価格のヨーロッパ地域とイスラム地域との間にみられた格差であった。こうして著者は、銅価格の変遷を資料から跡づけることによって、ヨーロッパ商人にとって銅輸出がいかにか大きな利益をもたらしたかを指摘する。たしかに、イスラム地域における銅価格は、十四世紀における非常に高騰の後、十五世紀において下落を示している。しかし、十五世紀後半には、採掘技術

の向上によるヨーロッパ地域での銅生産の上昇と銅価格の下落とが生じ、ヨーロッパ地域からイスラム地域への銅輸出は続いた。要するに、中世後期を通じて鑄造所への銅の供給は何の困難もなく続けられ、銅の輸入量は余りにも多かつたので、インド方面へ再輸出することさえできた程であった。

第四章「国際収支」。著者は、当時の国際収支を分析するに際し、限られた商品目についてしか見積りはできないとしながらも、まずイタリア語資料その他から、ヴェニス商人がイスラム地域に運び込んだ貨幣の額、ヴェニス商人が購入した香料の量とその価格、そしてイスラム地域で売られた銅、錫、鉛その他のヨーロッパ商品に関する情報を集め、次いでアラブ語資料からは、奴隸、鉄、木材その他の商品の購入に對する支出についての情報を収集し、以下のような結論を引き出している。

ヨーロッパ商人は香料の大部分の支払いを貨幣、貴金属でおこなったという従来の定説は、修正されなければならない。なぜならば、香料の対価物として相当量(約五十パーセント相当)の商品がヨーロッパ地域から輸出されているからである。従つて、イスラム地域の対ヨーロッパ地域交易における国際収支は黒字であったとしても、香料がインド方面から輸入された中継貿易品であることを考えると、その限りでは、財の移動からみた貿易収支は明らかにイスラム地域の輸入超過

であった。この輸入超過を補填し、さらにはイスラム地域の全体の貿易収支を輸出超過にまでしたものは、イスラム地域から西スーダン地域への劣悪な商品の輸出であった。この交易の西スーダン側の対価物は金であり、この金がインド方面からの香料の輸入を可能ならしめたのであった。

第五章「貴金属の消失と破局」。まず中世後期における貨幣史の概略が述べられ、貴金属貨幣はイスラム社会から完全に消失しなかったものの、徐々にその量が減少し、銅貨にとつてかわられたことが指摘される。しかし、貴金属の減少は不十分な供給の結果でもなければ、国際収支の赤字の結果でもなかった。その原因はマムルーク朝の社会体制のあり方に求められる。こうして著者は、マムルーク政府予算に占めた軍隊の維持費と軍事遠征のための莫大な支出、マムルーク軍人に対する懐柔策のための出費(Outage)、軍人・支配階級の奢侈な生活、政情不安と退蔵現象、そしてマムルーク政府の貨幣政策とグレッシャムの法則などを、豊富なアラブ語資料からの引用を交えながら検討していく。こうした社会体制的原因によつて貴金属は市場から流出して行つたが、それに追討ちをかけるようにして起きたのが、ポルトガル人の西アフリカ進出と西スーダンの獲得であった。

「結語」。中世末期の貴金属の減少は、純粹な経済現象ではなく、何よりもまずマムルーク体制のあり方という社会体制

的な原因によって引き起こされたものであった。こうして、豊富な貨幣流通を背景にして発展したイスラム経済は、八百年後には全く逆の現象、すなわち、貴金属の退蔵の結果崩壊したのであった。以上が本書の結論であるが、最後に著者はこの結論と前著『中世オリエント物価貨幣史』から引き出された成果とを合わせ考察し、以下のように述べて本書を終えている。オスマン・トルコの征服という破局は、決して突然起きたものではなく、それまでにイスラム経済は徐々に衰退していた。少なくとも十五世紀中葉までは豊富な貨幣が流通していたのだから、農作物の長期間に亘る低価格は流通貨幣量の不足の結果ではない。この低価格は、人口増加の少なさによる需要の停滞によって生じたものである。また、当時の金銀貨交換比率は長期的安定を示している。この事実を、当時のヨーロッパにおける貨幣悪弊に起因する貨幣交換比率の変動と比較すると驚くべきことである。そして、ヨーロッパでの貨幣悪弊は、経済の発展に伴って貨幣需要が増大し、交換手段が不足したために起った現象であった。これとは全く対照的に、イスラム社会における貨幣交換比率の安定は、貨幣需要の停滞が原因であり、従って、この現象と先に指摘した農作物価格の長期的低さとの間に対応関係を見ないわけにはいかない。すなわち、この二つの現象は、イスラム経済の停滞、さらには退行を示しているということである。

三

これまで本書の叙述に従って要旨を紹介して来たわけであるが、最後にコメントを加えてこの書評を終えたい。本書の白眉は、イタリア語資料を利用しての地中海交易の分析である。しかし、イスラム地域を要とした当時の国際交易網のなかにあつては、この地中海交易はその一翼を担っているに過ぎない。イスラム社会の国際収支を扱った本書には当然、イスラム地域とヨーロッパ以外の地域との間の交易についても言及されている。しかし、その分析は不十分である。こうしたことを本書に期待するのは無理であることは十分承知の上で、以下イスラム地域とヨーロッパ以外の周辺地域との間の交易についての問題点を指摘してみたい。

第一は、イスラム地域と西スーダン地域との関係である。西スーダンの金が地中海世界に与えた影響は、たびたび指摘される。しかし、ここで注目すべきは、西スーダン地域はイスラム地域へ金を供給したのみでなく、イスラム地域の地中海交易における貿易収支の輸入超過を補填する重要なイスラム物産の輸出市場であつた、という本書の指摘である。従って、ヨーロッパ商人の西アフリカ地域への進出は、イスラム地域への金の供給を減少させただけでなく、イスラム地域から重要な輸出市場を奪ったことをも意味し、イスラム地域の

産業に大きな打撃を与えた筈である。この点の強調が本書では不足しているように思われる。

第二は、イスラム地域と中央アジアとの関係である。本書では、中央アジア方面からの銀流入が強調されている。これまでイスラム地域への銀流入に関しては、ヨーロッパ地域との関連でしか考察されていなかったことを考えると、本書でのこの指摘は大きな進歩である。しかし、ヨーロッパ地域とイスラム地域との間の貴金屬移動に関しては、金銀比価の推移や商人活動の研究など経済史的分析を行なっているのに対して、中央アジアとイスラム地域との間の貴金屬の移動については、単なる政治的事件と結びつけられているに過ぎない。ここで思い出されるのは、愛宕松男氏の論文「幹脱銭とその背景—十三世紀モンゴル元朝における銀の動向」(上)・(下)『東洋史研究』第三十二卷、第一・二号)である。愛宕氏はこの論文のなかで、中国の投機的高利貸資本である幹脱銭を研究することによって、中国からイスラム地域への銀流出原因とそのルート、ならびに東西・銀貿易における西域商人の役割を明らかにしている。この論文が示すように、イスラム地域と中央アジアとの間の関係については、従来の文化・政治史的分析を越えた経済史的分析が不可欠であろうと思われる。

第三は、イスラム地域と黒海周辺地域との関係である。中

世後期のイスラム社会は、マムルーク奴隷出身軍人の支配下にあった。この体制を維持するためには、常に新たな若い奴隷の購入が必要であり、奴隷購入市場であった黒海周辺地域の治安維持に対して、イスラム社会は無関心ではおれなかった。奴隷購入が国際収支に占めた大きな位置は、本書での分析がよく示している。そして、I・M・ラビダスの著書『中世後期のイスラム都市』(I. M. Lapidus, *Muslim Cities in the Later Middle Ages*, Harvard Univ. Press, 1967)が見事に描き出したように、イスラム都市経済を支配したのは、これら軍人・支配階級であった。従って、イスラム社会の経済的弱体化と、オスマン・トルコの黒海周辺地域への進出とは無関係ではなかった筈だと思われる。

第四は、イスラム地域とインド方面の関係である。この時代の主要貿易品目であった香料は、インド以东から来たのであり、インド方面に相当額の貴金屬が流出したことは疑いない。従って、イスラム地域の対インド方面貿易の研究はきわめて重要なのであるが、本書では、その重要性を指摘するだけで、その分析にまでには至っていない。もっとも、インド洋貿易の研究は、イスラム社会経済史で最も立ち遅れている分野である。この空白を埋めるためには、今後一層の研究が必要とされるであろう。

以上の問題はすべて、国際貿易網の接点であったイスラ

ム社会の特異な位置に関するものである。そして、この特異な位置は、イスラム社会の貿易構造の特異性にも反映しており、そのことは同時に、社会体制と深く係わっていた、ということとは特に注目されてよい。つまり一方で、本来交易商品の一つに他ならない奴隷が消費者階級として支配したこと、そして他方では、イスラム都市経済は香料貿易という仲継貿易を富の源泉として繁栄したこと、この二つの特性は、東方からのオスマン・トルコの進出によって奴隷供給源が絶たれ、西方からのヨーロッパ商人の進出によって貴金属の供給源と商品輸出市場とを絶たれた時、その脆弱さを示したようである。本書ではこの点の強調が足りないように見え、更に検討を要することだと思われるが、このような疑問を抱かせ、研究の糸口を作ってくれるだけでも、本書が精読に値することは疑いない。

(Elizahu Ashfor, *Les Métaux Précieux et la Balance des Paiements du Proche-Orient à la Basse Époque*, S.E.V.P.E.N., 1971, 125p.)